

2025年2月2日 久宝教会 降誕節第6主日礼拝メッセージ

「子どもの目に映るもの」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 21章 12-17節

今日は2月2日、節分です。昔の暦では旧暦のお正月、いわゆる「旧正月」の頃でもありますし、共に新しい季節の始まりの行事として、難を祓って、福を招くということが、古くは1000年前の平安時代、『源氏物語』にも記されているそうです。また500年ほど前の宣教師たちの記録にも、「炒った豆を投げて、悪魔(鬼)を追い払う異教徒の習慣」(『日葡辞書』)と記されていますから、節分(難遣らい・鬼遣らい)の豆まきが、随分と昔から続けられて来ているということが分かります。

日本の暦では、そのような季節の変わり目の時期である一方で、教会の暦では、つい6週間前に目に見えない神が人間となって、私たちの間に宿られた。クリスマスにイエス様が赤ちゃんとして、この世界にお生まれになった、ということをお祝いしたばかりです。にも拘らずに、赤ちゃんだったはずのイエス様はあっという間に大人になって、大勢の人たちがやって来ては、その人たちに話をしたり、手当てをしたりしていた……。そうかと思いきや、今日には早くもエルサレム入城後の場面です。この後、イエス様は十字架に架けられていくといういわゆる「受難」への道に歩み出させられます。その「受難物語」の冒頭にあるのが、「エルサレム入城」のお話であり、それに続くこの「神殿から商人たちを追い出す」といういわゆる「宮清め」と呼ばれるお話でした。

エルサレムの神殿には、古代イスラエルの国、すなわちパレスチナ地方に住んでいたユダヤ人たちだけではなく、その他の地中海世界に広く離散して暮らしていたユダヤ人たちも、お参りにやって来ていました。そのためにエルサレムの町には、様々な国の通貨が流通していたようです。有名な所では、古代イスラエル社会を支配していたローマ帝国の貨幣である「デナリオン」で、労働者の一日分の賃金、日当に相当しました。「ぶどう園の労働者のたとえ」(マタイ 20)で、労働者たちに対して支払われているのも、この「デナリオン」でした。その他、ギリシャの通貨であった「ドラクメ」や「タラント」(マタイ 25)、「ムナ」(ルカ 19)なども流通していて、人々に知られており、それぞれ福音書に記されています。そのような社会背景の中で、神殿で用いられるお金には更にまた特別なルールがありました。

と言うのも、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」(マタイ 22)という有名なイエス様の言葉が語られるお話では、デナリオン銀貨には「ローマ皇帝の肖像と銘が刻まされていた」と記されていますが、そのようなお金を「あなたには、私をお

いて他に神々があってはならない」(出エジプト 20:3)と命じられている神様の神殿で使うわけにはいかない。だから、神殿で使うためのユダヤのお金に両替しなければならない。それで「両替人」という人たちが、神殿の境内に屋台を並べていたというわけです。当然、そこには「両替手数料」も必要でした。

しかも、神殿に納めるお金は、単なる自由献金ではなく、「神殿税」としてユダヤ人の成人男性には全員に律法で一律に課されていました(年に半シケル=2ドラクメ)。そして、それらを納めた上で、さらに各自が自由な金額の献金をしたようです。その他、犠牲の献げ物、生きた動物を「焼き尽くす生け贄」として献げるということもまた、律法に定められていました。その動物とは、牛や羊でしたが、それらは大変高価なので、お金のない庶民は、鳩でも良い(レビ 1)とされていました。そのために、神殿の境内には両替人たちと並んで「鳩を売る者たち」が屋台を連ねていたというわけです。

現代でも、縁日など、お祭りの日の屋台は、様々な物の値段が高く設定されていることが多いかと思います。それでも「お祭りだからそんなもの」「ここしかないから仕方がない」ということで購入していくのだと思いますが、恐らくそれは古代社会でも同様だったでしょう。神殿用のユダヤ貨幣に両替せざるを得ないから、両替手数料を支払ってでも両替する。遠方からはるばる生け贄の動物を連れて来るのは難しいから、神殿の境内で高額な動物を購入する……。商売人たちに場所を貸し出している神殿側も、商売人たちも、お参りに来る大勢の人たちを相手にして丸儲け、という権力に基づく搾取構造です。

もし、そのような神殿権力体制に対して、反対するような人がいたら、それこそ神殿の権力を笠に着て、「盾突く者は呪われよ(清めない、祝福しない)」とでも言えば、反対者たちは何も言えなくなってしまいます。そのような絶対的な宗教権力による支配の構造がありました。そのような時代の中で、イエス様はそのような腐敗した宗教権力者たちに対して真っ向から、「否(No!)」を突き付けたわけです。「マタイによる福音書」21章の12節以降です。

¹² それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を皆、追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを覆された。¹³ そして言われた。「こう書いてある。『私の家は、祈りの家と呼ばれる。』(イザヤ 56:7)ところが、あなたがたは、それを強盗の巣にしている。」(エレミヤ 7:11)

もうこれだけで境内は大混乱だったはずですが、商売人たちも、びっくりして呆気に取られていたかもしれませんが、台や腰掛、屋台がひっくり返されたり、動物たちが逃げ出したり、お金が散らばったりしては、たまったものではありませんから、

イエス様や弟子たちにつかみかかったりした人たちも当然いたはずで、それにも拘らず、イエス様は悠長にも、と言いますか、お構いなしにと言いますか、境内にいた「目の見えない人や足の不自由な人たち」の手当てをしていました。これらの人々は、体に障がいがあるという理由で、神殿の境内の奥にある聖所、いわゆる拝殿に近づいてはならない(レビ 21:16-23)とされていた人たちでしたから、イエス様の話を聞き、その姿を見かけて、必死な思いで周りに集まり、すがって来ていたのかもしれませんが。

その横では、子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいました。これは神殿の境内に入る直前の 21 章 9 節にもある言葉です。「ホサナ」というのは、「私たちを救って下さい」というアラム語で、ヘブライ語聖書の詩編 118 編 25-26 節に出てくる言葉ですが、その後、ユダヤ教の過ぎ越しの祭りの際に、繰り返し用いられるようになったようです。ですから、本来は「助けてください」という救いを求める叫びであったものが、時代を経てくる中で、このイエス様のエルサレム入城の場面では、「ダビデの子、私たちの救い主、万歳」というように、喜びの歓声として、人々は口々に叫んでいたということが分かります。子どもたちは、そのような大人たち、多くの人々の様子を見て、この賛美の言葉を聞き覚えたのでしょう。

現代でもそうです。通りかかった選挙演説や、街宣の声、デモ隊のシュプレヒコールなどを、意味も分からないまま、子どもが聞き覚えて口ずさむということは、いつの時代でもあることだと思います。神殿の外では、イエス様のことを大歓迎した人々も、権力体制の中心であった神殿の境内では、何も言えなくなっていました。そこではたとえ不満があっても、不本意であっても、律法や慣習に定められている通りに、納税して献金して、生け贄を献げなければなりません。そうしなければ、今よりももっとひどい目に遭わされるかもしれない。そのような恐怖感が人々を支配していたのだと思います。今日の言葉で言えば、ハラスメント状態にあったということでしょう。しかし、そのような物言えぬ状況、自分ではどうしようもない閉塞感、束縛された状況に、楔を打ち込み、打破し、解放しようとしたのがイエス・キリストの言動、言葉と振る舞いであり、またそのようなイエス様の「普通でない」有様に、素直にびっくりして、無邪気に「ダビデの子にホサナ」「救い主、万歳」と叫ぶ子どもたちの声でした。

私自身を含め、大人はすぐに自分のことだけではなく、まわりのことを考えたりします。あっちを立てればこっちが立たず、こっちを立てればあっちが立たず……。どうにもこうにも両立することが難しい状況の中で、「最善ではなくても次善は何だろうか」などということに悩むことも少なくありません。とりわけ、「立場」を

重視する日本社会の中では、自分の思いよりも、立场上正しいことを優先することの方が望ましいとされています。いや、むしろ、嫌々ながらも「立场上」やむを得ず行い続けているうちに、いつの間にか「立場」が自分自身になり代わってしまっていることすら、あるのかもしれませんが。果たして、そこに真の解放、救いはあるのでしょうか。

教会では、「社会の中で弱く小さくされている人たちを大切にしよう」と言われます。なぜなら、それは命の神の選びがそのような人々にこそ、優先的に注がれている（申命記 7:7）からです。しかし一方で、現実の社会では、公共福祉にせよ、ボランティアにせよ、それらは最優先事項ではなく、多数派の優先事項の二の次にされています。アメリカでは先月より、トランプ大統領の 2 期目の政治が始まり、口約通りに早速様々な大統領令が発出され、弱者切り捨て、少数者抑圧の政治が始められています。移民や外国人、子どもたちや障がい者、高齢者の方たちなど、少数者や社会的弱者と呼ばれる人たちは、それこそ生産性が低く、お金儲けにはつながらないから、邪魔な存在、社会のお荷物であって、できればいない方がよいと言われるのでしょうか。そのような優生思想や選民思想の行きつく先は、隣の人すら信用できない相互監視社会であり、自分がいつ攻撃されるか分からずに怯え続けなければならない恐怖社会であるということは、歴史が教えてくれています。

私たちが、弱く小さくされている人たちを大切にしたい、子どもたちを大切にしたい、と思うのは、そのような人たちこそが、実は社会の基盤をなし、底支えしているからであり、そのような人たち無しには将来がないからです。経済不況にせよ、自然災害にせよ、戦争にせよ、そのような人たちが真っ先に影響、被害を受けます。炭鉱に降りていく鉱夫たちよりも先に、「炭鉱のカナリア」がガスの影響を受けるように、私たちの社会も弱く小さくされている人たちが姿を見て、社会全体のあり方の方向転換をしていかなければ、あっと言う間に底が抜けて、砂上の楼閣が崩れてしまうのではないのでしょうか（安富歩）。

子どもの目に映るもの。それは己の立場や、損得・利害関係に関係なく、正しいものに正しいと言い、おかしいものにおかしいと言うこと。自分の周りにいる隣人の手を取り、必要な手当てをすることなのだろうと思います。そこにこそ、短期的な立場の存続でもなく、問題のやり過ぎでもない、本当の解決。真実の命へと至る道があるのではないかと思います。子どもたち、社会の中で弱く小さくされている人たちとの関わり合いを通して、私たちはまた本当の命へと続く歩みを教えて頂きながら、今日もまた生かされて参ります。